

夏休み少年少女名作鑑賞

少年時代から鑑賞眼を養い高めるといことは、将来の人間形成に役立つものが多分にあります。そこで新たな試みとして、夏休みの期間に、少年層でも理解できうるであろう心に残る映画を選んでここに特集をつくりました。ジュニア版フィルムセンターとして、御家族ともども御利用いただきたいと存じます。

上映は3時と6時15分の2回。先着順にて定員239名に達し次第入場を締め切ります（開館は12時30分）。
ヒル・ヨル全館入替え制。
小人100円
一般200円
学生140円

	ヒル（午後3時開映）			ヨル（午後6時15分開映）		
期日	題名	製作会社・製作年	監督	題名	製作会社・製作年	監督
8月8日(月)	風の又三郎（50分）	東映 1956	村山新治	8日 にあんちゃん（100分）	日活 1959	今村昌平
	二宮尊徳の少年時代（50分）	〃 1957	〃			
9日(火)	鐘の鳴る丘・隆太の巻（80分）	松竹 1948	佐々木啓祐	9日 明治はるあき（70分）	博物館明治村1968	五所平之助
10日(水)	野口英世の少年時代（50分）	東映 1956	関川秀雄	10日 キューポラのある街（99分）	日活 1962	浦山桐郎
	うなぎとり（50分）	松竹 1957	木村荘十二			
11日(木)	くアニメーション秀作集）					
	こねこのらくがき（13分）	東映 1957	森下泰司	11日 嵐（110分）	東宝 1956	稲垣浩
	夢見童子（16分）	〃 1958	蔭谷虹児			
	セロ弾きゴーシュ（50分）	三井プロ 1953	森永健二郎 川尻泰司			
12日(金)	姉妹（100分）	中央映画 1955	家城巳代治	12日 おかあさん（97分）	新東宝 1952	成瀬巳喜男

風の又三郎

東映1957年作品

原作＝宮沢賢治 脚本＝清水信夫 監督＝村山新治 撮影＝北山年 音楽＝木下忠司 出演＝久保賢（高田三郎） 松山省次（村の子） 宇佐美淳（三郎の父） 加藤嘉（先生） 谷さち子、堀込さなえ、久保田幸一郎、伊東隆、石川竜二、友繁洋明、小林勝、奥田真、左ト全、不忍郷子、関山耕二、清水正、玉井年晴、相馬剛三 5巻 1月1日封切 文部省選定。
<かいせつ>

岩手県が生んだ偉大な詩人・童話作家の宮沢賢治（1896～1933）は、若い時から法華教に帰依し、農業研究や農村指導にとりくむかたわら、詩「雨ニモマケズ」や童話「銀河鉄道の夜」、本作品の原作など数多く発表した。「風の又三郎」は、北海道から転校してきた三郎という不思議な少年をめぐって、村の小供たちが、各人各様の想像をめぐらし、ついには風に乗ってやってきて、風と共に去って行ってしまふく風之又三郎）だという結論に達し、彼をめぐる子供たちのほほえましいやりとりが、詩情豊かに描かれている。

二宮尊徳の少年時代

東映1958年作品

脚本＝片岡薫 監督＝村山新治 撮影＝仲沢半次郎 美術＝江坂実 音楽＝三木稔 出演＝山本豊三(金次郎) 友繁洋明(弟) 風見章子(母) 小川虎之助(伯父) 加藤嘉(ナレーション) 松本染升、戸田春子、関山耕司、森下義秀、小笠原章二郎 5巻 2月1日封切
<かいせつ>

二宮尊徳（1787～1856）は小田原近郊の貧農の家に生まれ、酒匂川の洪水による被害を目のあたりにし、独学によって農村改革にあたった人物である。長じて、徹底した実践主義と儉約・積善を説き、今日の協同組合ともいえる互助講や、神道・仏教・儒教の思想を合わせたともいえる報徳教を創始した。灌漑用水や築堤など、亡くなるまでに600以上の町村の復興・改革にあたった。本作品では、このような偉大な人物が形成された少年時代の生活を描いたものである。文部省選定。

にあんちゃん

日活1959年作品

原作＝安本末子 脚色＝池田一郎、今村昌平 監督＝今村昌平 撮影＝姫田真佐久 音楽＝黛敏郎 出演者＝長門裕之(安本喜一) 松尾嘉代(妹良子) 沖村武(弟高一) 前田暁子(妹末子) 吉行和子(堀かな子) 二谷英明(松岡亮一) 北林谷栄(坂田の婆) 芦田伸介(労務課長坂井) 西村晃(北村五郎) 小沢昭一(金山春夫) 殿山泰司(辺見源五郎) 山内明(鉱業所長) 大森義夫(関さん) 山岡久乃(西脇せい) 穂積隆信(桐野先生) 浜村純(せいの夫) 垂水悟郎(坑夫曾我) 辻伊万里(源五郎の妻たつ) 高原駿雄(自転車店主) 大滝秀治(いりこ屋西河) 8巻 (2775米) 10月28日封切 ベスト・テン3位。

<かいせつ>

原作は、10歳の少女安本末子が書いてベストセラーとなった同名手記である。1950年以後、不況の波が押し寄せていた炭鉱は、この当時には相かく艱切りや閉山で大きな社会問題となり、く黒い羽根運動）などが叫ばれていた。これは、そういう風潮の中で、九州の中小炭鉱の苛酷で悲惨な現実の中にあって、父母を失いながらも力を合わせ、健気に生きている兄弟の物語である。この原作を映画化するにあたり、新進シナリオライターの池田一郎と、これが監督第4作目の今村昌平は、主人公達がおかれている現実をリアルにとらえながらも、安易な同情や感情移入を排して、人間のもつヴァイタリティを強く前面に押し出している。長男役に若い演技派長門裕之を抜擢、脇役にヴェテラン俳優を配した他、三弟妹には3000人の応募者の中から選ばれた。中でも長女役の松尾嘉代はこの作品をきっかけに、日活の女優として育っていった。なおこの作品は、昭和34年度芸術祭大賞を受賞。

<かいせつ>

タカと太郎の母子は、夏休みに田の草取り

鐘の鳴る丘 隆太の巻

松竹大船1948年作品

原作＝菊田一夫 脚色＝斎藤良輔 監督＝佐々木啓祐 撮影＝森田俊保 音楽＝古関祐而 出演者＝佐田啓二（加賀見修平） 本尾正孝（弟修吉） 野坂頼明(隆太) 井上正夫(加賀見勘造) 英百合子(妻かね) 江原達治(昌夫) 大塚富子(あき子) 菅井一郎(秦野豊) 平野郁子(妻芳枝) 高杉好子(娘由利江) 笠智衆(立花) 山路義人(源吉) 飯田蝶子(しの) 山口勇(泉沢万次) 鈴木豊昭(桂一) 前田正二(俊次) 柴田幸男(留男) 小野寺薫(謙一) 伊藤和子(みどり) 深沢博夫(竜太) 9巻 (2228米) 11月29日封切

<かいせつ>

月緑の丘の赤い屋根、トンガリ帽子の時計台、鐘が鳴りますキンコンカン…………という主題歌（川田正子）とともに、戦後間もない子供たちの心をひきつけた、菊田一夫原作のNHK連続放送劇の映画化である。復員した兄修一が弟を捜しまわるうち、戦後の街頭にあふれる浮浪児の悲惨な状態を眼のあたりにし、彼らと力合わせて自分たちの家「鐘の鳴る丘」の建設に努力する姿を描いたものである。なお翌年、続篇ともいふべき「修吉の巻」、「クロの巻」も作られた。

明治はるあき

博物館明治村1968年作品

製作＝谷口吉郎、土川元夫 原作＝安藤鶴夫 脚本＝堀江英雄 監督＝五所平之助 撮影＝篠村莊三郎 音楽＝山下毅雄 朗読＝久米明 出演＝竹田人形座 カラー・70分 68年8月完成 芸術祭優秀賞受賞。文部省選定。

<かいせつ>

明治100年を記念して作られた作品で、名鉄が名古屋市郊外の犬山に設立した、明治期の著名な建造物を移築したく明治村」を背景にしている。3代にわたる一家5人が明治村を訪れ、そこで太郎爺さんが幼少の頃の明治期を回想するという構成で、ガス灯けむる銀座や鹿鳴館、浅草12階塔の見える浅草や物売り、四季折々の行事、樋口一葉や三遊亭円朝（声・安藤鶴夫）なども登場し、木下空太郎の詩が朗詠される。回想シーンはセットであるが、明治村の場面は戸外であり、現存の建物が背景にあるため撮影に困難をきわめ、人形操作の苦心の程がうかがわれる。

野口英世の少年時代

東映1956年作品

脚本＝片岡薫 監督＝関川秀雄 撮影＝北山年 美術＝阿部三郎 音楽＝池野成 出演＝大源寺英介(野口清作) 岸輝子(母しか) 浅野進次郎(父佐代助) 神代昌子(姉いぬ) 原保美（小林先生） 伊藤慶子（夫人） 島田久（松島屋長兵衛） 松本克平（郡の教育主任） 高山徹(渡辺医師) 5巻 6月1日封切

<かいせつ>

日本が生んだ偉大な細菌学者野口英世（1876～1928）は、福島県猪苗代湖畔の貧農に生まれ、苦学力行して北里柴三郎博士に師事し、ペスト菌の発見や毒蛇に関する研究、種々の熱帯性伝染病に関する業績をあげたが、アフリカのガーナで黄熱病の研究中、感染してその生涯を閉じた。本作品は、貧農の家に生まれ、ヤケドした手の手術に成功し、学問に励んで次第に医学への道を志すに至る少年時代を、美しい田園風景の中でさわやかに描いたものである。この作品は文部大臣賞、教育映画祭最高賞、それに第1回南アフリカ映画祭銀賞を受賞。文部省特選。

うなぎとり

歌舞伎座＝松竹1957年作品

企画＝近代映画協会 脚本＝新藤兼人 監督＝木村荘十二 撮影＝木塚誠一 美術＝矢野友久 音楽＝林光 出演者＝望月優子(タカ) 真藤孝行(太郎) 岸旗江、山岸美代子、三好久子、横美佐子、石島房太郎、寄山弘、宮本雅夫、竹本善彦、小沢哲、幕田茂、渡辺啓子、青梅の子どもたち 5巻（1322米）10月1日封切

<かいせつ>

タカと太郎の母子は、夏休みに田の草取り

の出稼ぎに出かけた。戦争で父を亡くした太郎を、タカは意志の強い子に育てようとした。村の人や子供たちは、よそ者の2人に冷たかった。うなぎとりの仲間に太郎は入りたかったが、母から働きにきたのだから遊んではいられないとさとされた。ある晩の大雨でうなぎとりの筒が流されそうになり、母子は必死でそれを守って村人に感謝された。太郎は仲間に入れてもらうことになり、とったうなぎを金にかえて海水浴に出かけることになり、タカがつきそいで選ばれた。子供たちは海水着をタカに贈った。――草取りが終って母子が帰る日、村人や子供たちはいつまでも名残りを惜しんだ。美しい田園風景を舞台に大人や小供たちの心暖まる交流が、さわやかに描かれた佳作である。キネマ旬報文化映画ベスト・テン第4位。文部省選定。

キューポラのある街

日活1962年作品

原作＝早船ちよ 脚色＝今村昌平、浦山桐郎 監督＝浦山桐郎 撮影＝姫田真佐久 音楽＝黛敏郎 出演者＝吉永小百合(ジュン) 浜田光男（塚本克巳） 東野英治郎(ジュンの父石黒辰五郎) 市川好郎(ジュンの弟タカユキ) 森坂秀樹(サンキチ) 小沢昭一(鑑別所の教師) 吉行和子(女工員) 殿山泰司(松永親方) 加藤武(野田先生) 北林谷栄(克巳の祖母うめ) 杉山徳子(ジュンの母) 菅井きん(サンキチの母) 浜村純(サンキチの父) 鈴木光子(サンキチの姉ヨシエ) 小林昭二(平さん) 下元勉(東吾) 岡田可愛(カオリ) 8巻 (2714米) 4月8日封切 ベスト・テン2位。

<かいせつ>

埼玉県川口市は全国でも有数の鑄物の町である。そこには、鑄物工場の熱気を排出するくキューポラ）が林立している。中小企業がひしめく中での人々の生活は決して楽ではない。主人公ジュンの家庭でも、父は失職し、母は一杯飲み屋で働いている。弟は非行少年になりつつあるし、唯一の親友は北朝鮮へ帰還してしまう。自分としてはあこがれの高校にも行きたいが家庭の事情が許さない。そして、ある日大人になった事を知ってビックリもする。子供から大人へ成長して行く過程で、誰もが悩み、苦しみ、そして社会の現実次第に目覚めて行く、そんな青春の一時期を丁寧に、清々しく描いた佳作である。監督の浦山桐郎はこの作品でデビューし、主人公を演じた吉永小百合の熱演は、最年少（17歳）でブルー・リボン主演女優賞を獲得して、少女スターから大きくはばたくきっかけとなった。

アニメーション秀作集

こねこのらくがき

東映1957年作品 森下泰次

夢見童子

東映1958年作品 蔭谷虹児

セロ弾きのゴーシュ

三井プロ1953年作品

製作＝厚木たか 原作＝宮沢賢治 脚色＝田中澄江、川尻泰司 演出＝川尻泰司、森永健次郎 撮影＝柿田勇 人形・美術＝川尻泰司、田中彌壯、山田三郎 音楽＝伊福部昭 チェロ＝井上頼豊 動画＝村田安司 出演＝人形劇団アーク コニカラー6巻

<かいせつ>

「こねこのらくがき」は、東映が動画部を設立して間もない頃の作品である。こねこの主人公が壁に汽車の落書きをしているうち、その絵が動き出すという、いかにもアニメーションならではの手法と構成による佳作である。「夢見童子」は、日本画家の蔭谷虹児が自から原画を描き、監修にあたった作品で、日本画調の絵と幻想的な物語りとで、それまでのアニメーションでは見られなかった美しい分野を開拓した佳作である。

「セロ弾きゴーシュ」は、宮沢賢治（1896～1933）の童話の一つで、同名原作を人形劇化した映画作品である。貧しい音楽青年がチェロをうまく弾くことができず、みんなに馬鹿にされていた。が、正直者の彼は努力を重ねていくうちに、ある日立派なチェロ奏者となり、人々の心を豊かにする人となった。人形劇団アークが全力をあげた人形劇映画で、国

産のコニカラー35%版を使用した実験的な映画でもある。

嵐

東宝1956年作品

原作＝島崎藤村 脚色＝菊島隆三 監督＝稲垣浩 撮影＝飯村正 音楽＝深井史郎 出演者＝笠智衆（水沢信次） 久保明（三男三郎） 雪村いづみ(娘末子) 山本廉(長男太郎) 大塚大介(次男次郎) 田中絹代(お徳) 加東大塚(誠心堂石井) 東郷春子(しづ江) 中北千枝子(女中お咲) 清水元(桜館北川) 稲葉義男(医者) 江川宇礼雄(八代教授) 山田巳之助(信次の兄) 12巻（2959米）10月24日封切

<かいせつ>

本作品は島崎藤村の同名小説の映画化である。大正期の東京を背景にして、仏文学の教授が四人の子供を残されて妻に先立たれ、長男を実家の後継ぎに、次男、三男は各々画家に、末娘を女学校にと、男手で子供を育てあげる約20年間の物語である。その間、父の仕事と生活苦との板ばさみや、子供の教育問題、親子関係の微妙な感情の動きなど、時代の流れに各々のエピソードをからませて、心暖まる作品となった。文部省特選。

稲垣浩監督（1905～ ）は無声映画期からの時代劇映画のヴェテランであるが、現代物にも名作「無法松の一生」(1943・1958）があり、特に子供を中心にした「手をつなぐ子等」(1948)、「忘れられた子等」(1949)「ゲンと不動明王」(1961）などの作品では、慈愛あふれる作風が特に顕著である。

姉妹

中央映画1955年作品

原作＝畔柳二美 脚色＝新藤兼人、家城巳代治 監督＝家城巳代治 撮影＝木塚誠一 音楽＝大木正夫 出演者＝野添ひとみ（近藤圭子） 中原ひとみ(妹俊子) 望月優子(石田民) 川崎弘子(近藤りえ) 多々良純(石田銀三郎) 内藤武敏(岡青年) 北林谷栄(しげ) 城久美子(はつえ) 加藤嘉(徳次) 殿山泰司(三造) 河野秋武(近藤健作) 10巻（2590米）4月10日松竹系封切 文部省選定。

<かいせつ>

原作は毎日出版文化賞を受けた小説である。山の発電所の社宅に住む親のもとを離れ、町に住む伯母の家から通学する姉妹の眼を通して、貧しい田舎の生活状態や、時折誤解を招く友人関係、そして身内の失職問題や恋愛問題などが描かれている。そして次第に目覚めていく過程で、明るく健かに育って行く姉妹像が、新藤＝家城の手でうまくまとめられている。家城監督は昨年（1976）病死し、若者の性教育問題を扱った「恋は緑の風の中」(1974）が遺作となった。

おかあさん

新東宝1952年作品

脚本＝水木洋子 監督＝成瀬巳喜男 撮影＝鈴木博 音楽＝斎藤一郎 出演者＝田中絹代(福原正子) 三島雅夫(夫良作) 香川京子(長女年子) 片山明彦(長男進) 横並啓子(次女久子) 岡田英次(平井信二郎) 加東大介(木村庄吉) 中北千枝子(栗原則子) 三好栄子(おばあさん) 中村是好(信二郎の父信造) 本間文子(母のみ) 沢村貞子(おせい) 10巻（2685米）6月12日封切 ベスト・テン第7位 文部省選定。

<かいせつ>

〈母の日）を記念して全国の小学生から募集した作文を、「おかあさん」と題した本にまとめ、それを映画化したのが本作品である。脚本を構成した水木洋子は、数多いエピソードの中から、夫を失い、長男をも病魔にさらわれて、女手一つで洗濯屋を続けながら、三人の子供を守り育てる母の姿を、長女から見た印象をナレーション形式で展開するという構成で、この時期数多く作られたお涙頂戴式のく母もの映画）と一味違った出来栄となった。本年3月21日に亡くなった大女優田中絹代が母親役を熱演し、娘には香川京子が初めて主演級の役柄に抜擢されて好演した。この作品はその後フランスの著名な映画史家、ジョルジュ・サドゥール氏の賞讃を浴びた。